

100号特集



焼け跡からの復興～全ての国民のために

～私の海外技術協力メモ～

(社)日本技術士会 北海道支部 第4代支部長  
技術士（水道部門）

岡 本 成 之

私は昭和42年度技術士本試験に合格して直後の昭和43年から技術士会関係の運営事務に参画させていただいた。その2年前に日本技術士会北海道支部と北海道技術士センターが発足しており、若手の戦力のひとりとして理事会などに顔を出していたのである。その頃はまだ札幌市役所に席を置く身としては、今と異なり、技術士登録の許可を上司から頂くなど憚られた時代でもあったので、未登録のまま技術士センターの方のお手伝いをさせて頂いたわけである。ようやく登録にこぎ着けたのは、役所を退職した昭和60年、当時の佐々木支部長のきつい御勧誘があったらと、今思い出している。

しかしその後も含めて、技術士資格を生かした職業についていないことに、最近漸く気づいて忸怩たる気持ちで一杯である。そこで来し方をつらつら思い返してみると、国内ではないが、海外では幾つかの案件に参画していたことに気づいた。

そこで忘れぬうちに、丁度良い機会を頂いたのを期に、それらのことどもをメモっておこうと、発心した次第である。

1. イスラマバット水道計画技術援助

JICAの全身OTCAが最初に行ったプロジェクト・タイプの技術援助である。当時厚生省水道課の山村課長補佐（後に水道部長）に半ば強制的に、昭和45年2月上旬から4月下旬までの足掛け3カ月間連れだされて、日本水道コンサルタントの面々とチームを組み、西も東も分からぬままに、初体験のジェット機DC-8で羽田を飛び立ったものである。昔の東パキスタンのダッカで入国審査があったが、

空港内は殆ど電灯が灯いてなく、真っ暗だったことを覚えている。パキスタンのカラチで国際線と別れ、国内線のPAでラホール、ラワルピンチに到着。ここから迎えの車で首都のイスラマバッドに入ったのである。

CDA（首都整備局）にオフィスを開いて、水道計画調査に入ったのだが、人口12万人程度の現況から250万人の大都市をイメージすることの難しさをしみじみ味わい、技術者の限界を思い知らされたのである。人口は今も大して変わらないそうだが、当時の首都は夜になると、コヨーテの遠吠えが聞こえるという寂しさであった。

いちばん応えたのは、水道計画は他に数カ国のものが既にあって、国際コンクールに参加させられたことが判明したことである。

2. インドネシア政府水道研修所

この計画は昭和48年から50年迄の3か年計画で実施されたもので、当時北海道大学の丹保教授を団長に、水道事業体から講師を募って開所にこぎ着けたのだが、この講師集めが大変で、当時国立公衆衛生院の水道部長であった南部祥一先生と、部長室から各都市の水道事業体へ、勧誘の電話をかけまくった思い出がある。南部先生はその後間もなく夭折されたが、誠に惜しい方を無くしたものである。

渋る事業体から、兎にも角にも講師陣をかき集めて第1回の講習を開始したのが昭和48年8月、私はコース主任として1カ月滞在した。

翌昭和49年の第2回は11月から1カ月主任講師として、第3回は昭和50年7月から1カ月アドバイザー

ザーとして研修所の講義を担当した。いまから考えると、相当無鉄砲なことをやらかしたものと反省しきりであるが、皆若かったからやり通せたんだと今懐かしく思い出している。

研修では、テキストなどの教材から実験用の器材や接合演習のための資機材等々、通関に手間取ったものも少なからず、コース維持のためには相応の努力が必要で、おおいに勉強をさせられたというのが本音である。

この時の研修生の数名とは、今もってメール等で交流を深めているが、われわれが引き揚げたあと、研修所が継続されなかったのは、今もって慙愧に耐えないものがある。私はこの時、インドネシア国公共事業大臣特別表彰を頂いた。

その後昭和61年にはジャカルタ市水道業者資格試験講習会、昭和62年にウジュンパンダン水道研究会など、さらに二度にわたってインドネシアを訪れたから、彼の地とは浅からぬ縁があると思っている。

### 3. タイ王国水道技術訓練センター

昭和62年4月に、タイ王国水道研修所巡回指導調査団(JICA)の一員として、タイ王国首都バンコックを訪れた。我が国のODA援助で建設した水道研修所(NWTTI)の開所式に参列して記念講演を行い、その後タイ国側と計画中の第3番目の支所の選定について討議し、各地を視察、指導を行うというプログラムであった。もっともこの人選はどなたかのキャンセルで、急遽私に回ってきたもののようで、極めて短時間での講演準備を余儀なくされ、大慌てで出発したことを覚えている。

講演「Human Resources Development」は、現地トレーナーのお助けで無事終わり、なかば行楽気分各地を回ったが、支所選定の会議では、公的な英語のやり取りで、プロトコルをもっと勉強せねばと強く啓発されたものである。

同年12月中旬、バンコックで開催された第6回アジア・太平洋地域国際水道会議に出席したりして、タイ王国との縁も深まっていったが、図らずも翌昭和63年には二度かの地を訪れることとなった。

先にも述べたとおり、NWTTIにはすでに2か所

の支所の建設が決定されていたのであるが、漸く着工したので工事監理に行っていこうというものである。「タイ王国水道技術訓練センター工事監理員」という辞令を頂戴して、バンコック、チェンマイ、コンケンと、建設中の支所を2週間かけて見て回ったのである。

これが1月から2月にかけてであったが、すっかりJICAに見込まれたのか、3月末には今度は「工事検査員」と言うことで、微笑みの国と言われるタイ王国を再々訪れることになり、お陰様でタイ王国の水道事情には、やや詳しい人の一人となったものである。

### 4. 日中友好水道研修センター検討訪中団

私の海外での仕事はどちらかといえば先進国よりも開発途上国に重心があるようで、渡航歴から言うと3対2と言うところ、それに水道研修所に関係しているものが多い。

齡還暦を過ぎて、長逗留の一人旅はもうよそうと考えていた矢先に、突如降って湧いたのがこの日中友好水道会のこのプロジェクトである。

平成2年の7、8月と10、11月の二度、中国を訪れることとなってしまった。目的はODA援助で中国に水道研修所を誘致するための根回しで、中国政府建設省と建設場所・カリキュラム・資器材・教習方法等々を事前打合せして、その総経費をはじき出して中国側に提供しようというものである。

北京の建設省での度々の検討打合せ、建設予定場所ではそれぞれお目当ての方々の懐柔など、慣れぬ中国語—日本語でのやりとりは、結構気の抜けない緊張の連続で、へとへとにされたものである。

立派な？計画書を作成して中国側にお届けしたのだが、その後他の重要案件(中国側の認識)に気押されて、未だODAの陽の目をみそうにないのは、いかに悠揚迫らぬ大国とはいえ、いささか気掛かりである。

以上、筆の赴くままに「私の海外技術協力メモ」を書き記してみたが、「うん、あいつも技術士らしい仕事をしてたんだな」とご理解いただけたら光栄に存ずる次第である。